

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 6 日現在

機関番号：32517

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23531081

研究課題名(和文) 保育実習における自己評価規準の開発 ルーブリック評価と心理学の観点から

研究課題名(英文) The development of self-evaluation criteria in the nursery teacher internship -In the perspective of rubric evaluation and psychology-

研究代表者

沢崎 真史 (SAWAZAKI, Mafumi)

聖徳大学・児童学部・教授

研究者番号：80320703

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：保育実習における自己評価規準を開発するため、はじめに、自己効力感尺度を作成し調査を行ったところ、自己効力感は、1回目の実習後に高まるが、学年進行に伴い低下することがわかった。次に、保育者の専門的職業能力を検討するため、保育所長・主任に対する質問紙および面接調査等を行った。その結果、大学卒業時に期待される資質は、子どもへの愛情や社会性、保育に関する専門知識であり、その他の資質は働きながら身につけると捉えられており、10年近くをかけて獲得される資質もあると考えられていることが示された。以上の結果を踏まえ、保育実習において身につけることが期待される4つの資質についてのルーブリックを開発した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is developing self-evaluation criteria of the nursery teacher internship.

First, we developed "internship self-efficiency scales" to comprehend how students grow through the internship. And using them, we clarified that students enhance self-efficiency through the internship, while reducing it as the school year advances. Second, we examined the profession ability for nursery teacher based on questionnaire and interviews to active-duty and former nursery teachers. They thought some of the profession ability should be acquired before graduation, but the others should be acquired through days to work. And our analysis of instructors' comments on internship records also showed they mainly commented about particular aspects of the ability. Therefore, we concluded self-evaluation criteria of internship should not involve all the profession ability for nursery teacher, developed rubrics relating to four aspects expected to acquire through the internship.

研究分野：教育心理

キーワード：保育者養成 実習 ルーブリック評価 コンピテンシー 自己効力感

### 1. 研究開始当初の背景

保育者は、乳幼児・児童の保育や指導のみでなく、保護者支援、地域支援の役割を担う専門職業人としての役割が期待されている。しかし、中央教育審議会答申(2006)でも指摘されているように、現代の保育者養成の大学教育においては、幼稚園や保育所、施設などにおける実習がカリキュラムの中で重要な位置を占めているにもかかわらず、資格取得のための授業が先行し、実習目標、実習の準備の方向性、振り返りの視点も明確でない。

実習不安や実習に関する自己効力感が実習に及ぼす影響に関する先行研究からは、実習の複雑さが明らかとなり、実習が養成カリキュラムにおいて重要にも関わらず、十分に機能しているとはいえない現状が示されている。申請者らも事前指導プログラムの改善<sup>1)</sup>、実習前後の学生の成長や変化について実践研究を行い<sup>2)</sup>、実習が将来のキャリアへの積極的な意思を醸成するために機能せず、むしろ自信の喪失や学業への躓きのきっかけとなっていることを明らかにした。また、学生の課題認識に関する調査<sup>3)</sup>では、実習前は、教材の種類や子どもの発達段階への知識などの情報不足に不安を感じているが、実習後は実習で直面した問題への解決方法を見いだせないことを課題として認識していることが明らかとなった。

複数の免許・資格を取得する学生は、それぞれの資格に関連して複数回の実習が行われているにも関わらず、実習での経験が段階的に積み重なっているとは言えない状況がある。4年間かけて専門職業人としてのキャリア形成をしていくことを考えると、大学での4年間を視野にいったプログラムを検討する必要があると思われる。学生がひとつひとつの実習の達成目標を主体的に明らかにして(Plan)実習に臨み(Do)、実習後の振り返りによって次の実習への課題を設定し(Check)、新たな実習目標を掲げて次の実習に取り組む(Action)仕組みが整備されることで、学生は本来あるべきのぞましい教師像・保育士像を自覚し、キャリア意識へとつながっていくと考える。

しかし、この作業は学生が一人ではできないものではなく、友人同士、教員、実習指導者との相互のコミュニケーションがあってこそ、実習による学習が有効に機能するものと思われる。

以上のことから、大学での4年間に実施される実習とその事前・事後指導のカリキュラムが、学生のニーズと実態に即しているのか。実習を積み重ねることによって保育者としての資質・能力や自己効力感、不安感に変化していくのか。どのような支援ツールが、学生自らが自分自身の実習に目標をもって望み、その次の実習に繋げることを可能にするのが課題として考えられる。

したがって、本研究では実習に影響を及ぼす心理的要因としての自己効力感、実習に関

する不安、および資質能力の観点から検討したい。また、実習の達成目標と到達度をルーブリック評価の観点から質的に検討して開発を試みたい。ルーブリック評価については、既に、児童生徒の授業を対象とした試みや教師としての評価が検討され始めているが、保育実習においても新たに検討したい。保育実習において、達成目標と到達度の観点から検討することは、実習評価を実習指導者に任せている現状を考えると、学生、実習の指導者、大学の指導者の三者間における相互のフィードバックに活用できると考えている。

### 2. 研究の目的

社会から要請される保育者(保育士・幼稚園教諭)の役割が多様化したことに対応して、大学教育における保育者養成プログラムの充実が必要であり、特に、保育実習・教育実習の担う役割は大きい。しかし、実習における達成目標の設定や到達度に関する評価についてはあいまいな点が多いのが現状である。

そこで本研究では、学生が主体的に学ぶ質の高い保育者養成プログラムを目指して、保育実習における達成目標と到達度をルーブリック評価の観点から明確化し、「保育実習自己評価」規準を開発することを目的とする。さらに、実習への心理的影響要因の横断的・縦断的分析の結果と合わせて効果的な実習を進めるためのポートフォリオを設計する。

### 3. 研究の方法

本研究では、保育者養成に関する実習プログラムへの心理的影響要因とルーブリックの観点から「保育実習自己評価」規準の設計のための実証的研究を行った。具体的には、主に以下の3点について研究を進めた。

(1) 実習における自己効力感について：関連要因、構造、及び実習前後の自己効力感の変化の調査研究

(2) 保育士の専門的職業能力について：保育士コンピテンシー、社会人基礎力等、先行研究における関連概念の検討及び保育現場の管理職を対象とした調査

(3) 保育実習自己評価規準について：実習指導における自己評価規準作成に向けて、実習生の指導にあたる保育士への質問紙調査及び面接調査、並びに実習日誌における保育士のコメントの分析

### 4. 研究成果

(1) 実習における自己効力感について

学生の実習を検討するための手掛かりとして、近年保育者養成において注目を集めている自己効力感に着目し、実習における効力感を客観的に測定するために、学生の体験を反映させた「保育実習自己効力感尺度」を作成し、保育実習との関連を検討した。

予備調査として、実習効力感尺度項目を収集するために、2008年12月に保育士資格取

得予定の学部3年次生女子240名を対象に自由記述による調査を実施した。収集された項目をKJ法により整理し、その項目と小藺江<sup>4)</sup>による項目を参考に検討し、最終的に70項目を作成した。

次に、実習自己効力感の構造を検討するため、2010年7月に保育士資格を取得予定の学部3年次生女子240名を対象に予備調査で作成した保育実習自己効力感尺度70項目について質問紙調査(「しっかりできると思う」「まあまあできると思う」「あまりできないと思う」「全くできないと思う」4点~1点;4件法)を実施した。因子分析(主因子法、プロマトリックス回転)の結果、以下の6因子を抽出した。

- ・第1因子:実習に向けての積極的実習態度
- ・第2因子:実習の計画・実行・記録
- ・第3因子:保育の理解と対応
- ・第4因子:子どもとのコミュニケーション
- ・第5因子:保育教材の工夫
- ・第6因子:実習のストレス対処

それぞれの信頼係数(係数)は.827~.859で、内的整合性は認められた。本尺度は最終的に48項目となった。

以上により作成された保育実習自己効力感48項目について、第1回目の保育実習における保育実習自己効力感の変化を検討するため、2010年7月(実習前)及び2010年11月(実習後)に、保育実習(第1回)に参加した学生を対象に質問紙調査を実施した。ただし分析対象者は実習前後のデータが一致し、欠損値のない学生152名とした。結果、実習の前後についてt検定の結果、すべての下位尺度得点において実習前より実習後の方が1%水準で優位に高く、実習を通して自己効力感が高くなった。これは保育所実習以前に経験した幼稚園や小学校の教育実習とも共通する実習体験である一方、あらたな実習としての学びが反映されたものと考えられる。

この保育実習自己効力感尺度を用いて、3回の保育実習における実習自己効力感の変化についての調査を実施した。私立女子大学児童学科3年次生86名(調査開始時)を対象に、2010年8~9月(保育実習1回目)、2011年2~3月(保育実習2回目)、2011年8~9月(保育実習3回目)の3回の実習に伴い、その前後に計4回の調査を実施した(第1回:2010年7月、第2回:2010年11月、第3回:2011年6月、第4回:2011年12月)。6領域の4回の平均値を尺度得点として、一元配置分散分析の反復測定で分析を試み、有意な主効果が認められた場合にはその後多重比較を行った。結果、「積極的実習態度」「子どもとのコミュニケーション」は、1回目の実習の前後で有意に実習自己効力感が高くなり、2回目以降は変化がなかった。「実習の計画・実行・記録」は第1回調査から実習を重ねることで次第に効力感が高まっていた。「保育の理解と対応」は1回目の

実習前後で有意に上昇しているが、2回目の実習後で有意に下がり、3回目の実習後で再度有意に上昇している。この変化は、1回目の実習では保育内容について効力感が高まっているが、2回目の実習後には保育の難しさに気づき自己効力感が下がったと考えられる。「保育教材の工夫」は3回の実習の前後で有意な変化がなかった。「実習のストレス対応」は1回目の実習前後で有意に上昇し、その後3回目の実習後に、更に有意に上昇した。以上のことから、1回目の実習の重要性が把握された。1回目の実習において保育の現場について基礎的なことを学び、その後の実習の基礎固めをしているといえる。したがって、1回目の実習の事前事後指導を丁寧にしていくことの重要性が示唆された結果といえる。

さらに、大学4年間を見越した指導の方向性を検討するため、4学年における実習自己効力感の学年差の調査を実施した。私立大学児童学科(幼稚園教員・保育士資格取得予定者)1年生418名、2年生254名、3年生103名、4年生208名を対象として、2012年5月に、実習自己効力感尺度について質問紙調査を実施した。なお、調査時期である5月の時点で、1年生は入学直後、2年生は1回目の幼稚園実習後、3年生は2回目の幼稚園実習後、4年生は2回の幼稚園実習と2回の保育実習後の状況である。4学年の比較の結果、実習自己効力感のうち「実習の計画・実行・記録」は1年生と2・3・4年生との間に有意な差があり、1回目の幼稚園実習において実習の基本的な実習録、指導案作成や計画、記録については学んでおり自己効力感が高くなっていることがわかる。「実習への態度」については、2年生より3・4年生が有意に高くなっている。2回目の幼稚園実習によって、保育への責任を自覚し、自分の行動に責任を持てるようになってきている。しかし、3年次で行われる保育実習後にもかかわらず、3年生と4年生との間に差がないということは、2年までの実習で「実習への態度」については学んでいると理解できよう。「教材への工夫」については、1年生が最も自己効力感が高く、4年生が最も低くなっている。また、「実習の理解と対応」についても、1年生が最も自己効力感が高く、3年生が低くなっている。これらは、実際に必要とされるレベルを現実的に把握できないうちは自分のしたことを高く見積もるが、実習を重ねて準備や現実の保育の難しさに気づくにつれて、相対的に自己効力感が低下していったものと思われる。「子どもとのコミュニケーション」及び「実習のストレス対応」については、学年による有意な差は見られなかった。以上により得られた実習自己効力感による変化の特徴をとらえることで、保育者養成のための実習の課題が明らかとなり、実習指導も充実すると考えられる。

(2) 保育士の専門的職業能力について

近年注目されているコンピテンシー概念を援用しながら、保育者に求められる専門的職業能力、また大学における保育者養成において身につけるべき専門的職業能力とはどのようなものかを明らかにするため、佐藤ら<sup>5)</sup>の、保育者養成課程において身につけるべき能力として期待されているジェネリックスキル及び専門的職業能力の尺度を用いて、2012年6月に保育所の園長、主任の66名を対象に、保育現場の保育者が実習生及び新任保育者に期待している専門的職業能力について調査を実施した。調査内容は、保育士としての資質能力、総合指導力、個別的・具体的保育知識・実践力、保護者・地域との関わり、園内における協同性・関係構築性、専門的知識・技術、子育て支援、

その他の8つのカテゴリーからなる全79項目で、各項目を「保育者として必要不可欠な能力」「卒業直後に身につけていることが期待される能力」「採用後3～4年後に身につけていることが期待される能力」の各段階において保育士の専門的職業能力として重視しているかどうかを選択してもらった。調査の結果、まず保育現場から見た「保育者として必要不可欠な能力」について、多くの園長・主任がおおむねすべての項目カテゴリーを選択していたが、中でも「保育者としての資質能力」「総合指導力」「個別的・具体的保育知識・実践力」「その他(社会人としてのマナー、職業倫理が含まれる)」の割合がやや高くなっている。細目ごとにみると、「組織の一員としての信頼と責任感」「子どもに対する信頼と責任感」「子どもの心情を思いやり、共感する力」といった基本的資質に関わる能力に加え、「身だしなみ、時間規則といった社会的マナー」「プライバシーや秘密保持能力」といった社会人としての常識・倫理が多く選択されていた。次に「卒業直後に身につけていることが期待される能力」について、「子どもの心情を思いやり共感する力」「子どもに対する信頼と責任感」といった基本的資質に関わる能力、「身だしなみ、時間規則の遵守などの社会的マナー」「自己の心身の健康管理」など社会人としての態度に関わる能力、また保育者養成に関わる専門知識に関わる能力が多く選択されていた。他方、「保護者・地域との関わり」や「子育て支援」に関する能力については、大学卒業時にはほとんど期待されておらず、就職後に保育者として働きながら身につけていくことが期待されていることが明らかとなった。

さらに、経済産業省が提示する社会人基礎力を参照しながら保育者の専門的職業能力の構成要素を明らかにするため、2011年7月～2012年7月に、学内外で実施した現職者研修に参加した保育士・幼稚園教諭及び保育所・幼稚園管理職246名を対象として調査を実施した。内容は、社会人基礎力のaction(前に進む力)、thinking(考え抜く力)、team work(チームで働く力)の3つの能力、12の

能力要素の認知度の確認、保育士・幼稚園教諭の業務における「社会人基礎力」の重要度(上位3つを選択)、保育士・幼稚園教諭の業務における「社会人基礎力」の不足度(上位3つを選択)、「保育士・幼稚園教諭の管理職としての業務における「社会人基礎力」の重要度(上位3つを選択)となっている。調査の結果、まず社会人基礎力の認知度について、保育現場での社会人基礎力の認知度は概して低く、調査時点では保育士の養成や採用のポイントにはなっていないことが明らかになった。次に保育現場で求められる能力について、社会人基礎力の3つの能力のうち最も重要だと考えられる能力を尋ねたところ、「チームで働く力」が重要であるという回答が圧倒的に多かった。さらに社会人基礎力の12の能力要素のうち保育現場で最も重要だと考えられるもの上位3つを尋ねたところ、「柔軟性」「状況把握力」「傾聴力」といった能力要素が重要とされていることが明らかになった。

### (3) 保育実習自己評価規準について

(1)及び(2)の成果をふまえ、保育実習自己評価規準の作成に向けて、大学卒業時に求められる保育者の専門的職業能力を多面的に把握することを試みた。

まず、勤続年数10年以上の保育士・元保育士6名を対象として、面接調査を実施した。その結果、養成段階においては、「子どもを理解し、信頼関係をつくる」「保育を振り返る」資質能力の前提となる、子どもや保育について深く考えたり、自分自身を見つめ直したりする機会を持つことが求められていること、「保育の計画を立てる」「生活・遊び等を支援する」資質能力の獲得に関して、保育者は採用一年目の経験と失敗から、保育を理解する大事な視点を身につけることになるので、この時期に様々な保育を経験すると同時に、適切な指導やアドバイスを受けられる環境が必要であること、保育者が一人前に成長するのは保育実践を通してであり、自律した保育者として見通しを持ち、子どもの実態に応じた保育が期待されるのは採用後3年目以降であること、また園全体を視野に入れた「保育の計画を立てる」「生活全体の管理」資質能力の獲得には採用後、5年から10年の時間が必要と思われることなどが明らかとなった。

さらに、大学での保育士養成課程のうち、さらに実習期間に時期を限定し、そこで身につけることが期待されている資質能力を検討するため、実習日誌における指導保育士のコメントに着目し分析を行った。データとして使用したのは、2013年2月及び9月にそれぞれ学部3年次と4年次に行った保育所実習の実習日誌43冊で、その内訳は、学生26名分の実習日誌のうち、1回目の保育所実習の実習日誌は23冊、2回目の保育所実習の実習日誌が20冊である。各実習日の講評欄における指導保育士のコメント総数は2397

件である。指導保育士のコメントを文章ごとに分割し、それぞれを高山(2011)<sup>6)</sup>の6つのコンピテンシーに関わる指導コメント及びそれらに分類することが困難な指導コメント並びに指導とは無関係のコメントの8つのカテゴリーにコーディングし、各カテゴリーにあてはまるコメントを量的に比較した。また、「保育実習自己評価規準」の作成のために、カテゴリーそのものの検討も行った。その結果、コメントが多かったものは「子ども(乳幼児)と信頼関係をつくる」「子ども(乳幼児)とその環境を把握する」「保育の計画を立てる」で、これに対して「生活・遊びを支援する」のうち「生活を支援する」や「生活全体を管理する」についてはコメントが少なかった。「子ども(乳幼児)と信頼関係をつくる」について、子どもへの寄り添い方に関して、実習生の実際の言動や態度を評価する記述が多く、直接的なアドバイスの要素は少なかった。「子ども(乳幼児)とその環境を把握する」について、集団における子どもたちの姿の発達に関する一般的な解説が多かった。実習生の書いたエピソードを一般化する役割を果たしているのではないか。また、子どもの姿を踏まえた上で、保育者の関わり方や意図を説明する記述が続くことが多かった。「保育の計画を立てる」について、保育のねらい、保育の意図、環境設定の理由のほか、保育者の願い(期待)のような記述もみられた。「日頃から心がけていること」や指導案における「配慮事項」なども多かった。これらの結果から、保育者に必要な資質能力の具体的な内容を行動レベルで検討するとともに、特に実習時に獲得が求められる資質能力が明らかになった。

最後に、これまでの研究成果をふまえながら、「保育実習自己評価規準」の作成と、振り返り・自己評価のためのポートフォリオの開発に取り組んだ。今後は、作成した評価規準による評価を試験的に実施し、学生の成果と問題点を探っていきたい。

- 1) 森田史郎、野上遊夏、長谷川晶子「幼稚園教員養成における教育実習プログラムの改革に関する取り組み-学生よるポスターセッションの実施事例」聖徳大学 FD 紀要,3,pp.13-23(2008)
- 2) 柳澤邦子、原本憲子、野上遊夏「幼児教育実習事前指導プログラムの改善-学生チューターによる実習生支援の取り組み-」聖徳大学 FD 紀要,4,pp.13-23(2009)
- 3) 野上遊夏、森貞美、細戸一佳、木下昭一「教育実習生支援のためのデータベース構築-学生相互の情報交換ツールとして-」日本教育情報学会第25回年会論文集,pp.350-351(2009)
- 4) 小藺江幸子「保育実習自己効力感尺度作成の試み」淑徳短期大学研究紀要,48,pp.123-135(2009)
- 5) 佐藤弘毅「短期大学における今後の役

割・機能に関する調査研究」文部科学省平成21-22年度先導的<sub>2</sub>大学改革推進委託事業成果報告書,目白大学(2009)

6) 高山静子「コンピテンシー理論に基づく保育士養成教育の研究」九州大学大学院(2011)

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 7 件)

沢崎真史、上田智子、野上遊夏、細戸一佳、森貞美、保育士の専門的職業能力とはなにか 実習日誌の指導コメントに着目して、全国保育士養成協議会第53回研究大会、2014年9月19日、「ホテルニューオータニ博多(福岡県福岡市)」

沢崎真史、野上遊夏、細戸一佳、李貞美、大学卒業時に求められる保育者の専門的職業能力、日本保育学会第66回大会、2013年5月12日、「中村学園大学(福岡県福岡市)」

沢崎真史、細戸一佳、野上遊夏、森貞美、上田智子、実習における実習自己効力感の変化、日本教育心理学会第54回総会、2012年11月23日、「琉球大学(沖縄県中頭郡)」

沢崎真史、上田智子、保育者コンピテンシーをふまえた保育者養成プログラムの開発にむけて-社会人基礎力の観点からみた保育者の専門的職業能力 日本キャリア教育学会第34回大会、2012年10月28日、「滋賀大学(滋賀県大津市)」

上田智子、沢崎真史、森貞美、細戸一佳、野上遊夏、保育士の専門的職業能力とはなにか、全国保育士養成協議会第51回研究大会、2012年9月7日、「京都文教大学(京都府宇治市)」

沢崎真史、李貞美、野上遊夏、3回の保育実習における実習自己効力感の変化、日本保育学会第65回大会、2012年5月5日、「東京家政大学(東京都板橋区)」

沢崎真史、野上遊夏、森貞美、実習における自己効力感とその関連要因 その1:尺度の作成と実習前後の比較を中心に、日本保育学会第64回大会、2011年5月21日、「玉川大学(東京都町田市)」

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等：なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

沢崎真史 (SAWAZAKI, Mafumi)  
聖徳大学・児童学部・教授  
研究者番号：80320703

(2) 研究分担者

野上遊夏 (NOGAMI, Yuka)  
聖徳大学・児童学部・准教授  
研究者番号：70364974

森貞美 (MORI, Jeongmi)  
聖徳大学・児童学部・准教授  
研究者番号：10337850

細戸一佳 (HOSODO, Kazuyoshi)  
帝京大学大学院・教職研究科・准教授  
研究者番号：90337775

上田智子 (UEDA, Tomoko)  
聖徳大学・児童学部・講師  
研究者番号：50334561